

うさぎおいし

高橋 覚かく

兄と亡き父母に捧ぐ

人間とは何か、を知っている人は、ほとんどいない。しかしそれを感じている人は、おおぜいいる。それで、その人たちは、他の人よりは安らかに死んで行く。ちようどわたしがこの物語を書き終えたら、いくらか安らかに死ねるように。わたしはあえて自分を知っている者とは呼ばない。わたしは、さがし求める者であつた。

——「デミアン」序

少年よ、走れ、おもいつ切り突つ走れ。大地を踏んで、冷たい風を口いっぱい吸つて。何十年経たとうが、少年よ、君はおもいつ切り走ることを忘れてはならない。かじかんだ冬の日の君は、うん、たしかに今にも泣き出しそうだけど、見よ、心は幸せでいっぱいではないか。そうだ少年よ、君は君の友だちにも、そのことを教えよ。冷たい風を切つて、いっしょに走ってみないか。大きく息を吸つてみないか。

……

君は、七つの極彩色の中で、とても珍しい紅葉もみじを、宝石のようにだいに掌てのひらに包んでいる。なんてうれしそうな顔だろう。なんて得意ごうそうな瞳まなこをしていることか。

